

## 「マイルドな高気圧酸素 (Mild HBO)」と呼ばれる健康回復法について

—多くの方々に是非とも知っておいていただきたいこと—

八木博司

有限責任中間法人 日本臨床高気圧酸素・潜水医学会代表理事

最近、我が国でも気圧を若干高めて酸素含有量を多くした空気を吸って健康を維持しようとする Mild HBO なる健康法が渡来し、それに用いる装置として“膨張式のチャンバー”が米国などから輸入され、リラクゼーションや健康回復などの目的で使用されています。これは病院にある鋼鉄製の“硬い”チャンバー（タンク）などではなく、ナイロン製の布地などでできていて、畳まれた状態から中に空気を入れて膨張させ、その中に入って健康の回復を図ろうというものです。医師が関与する高気圧酸素治療においては高濃度の酸素が必要で、安全管理においても一定の水準が求められますが、この“膨張式のチャンバー”の場合には我々の周りにある普通の空気（酸素濃度は21%）を用いて、中の圧も地上の気圧（1気圧）の3割増し（1.3気圧）程度のです。この程度の圧ですと医師の関与を必要とせず使用するガスは空気で100%酸素ではありませんので、我が国の医師法にも、薬事法にも抵触しないで使用できるということです。Mild HBO(hyperbaric oxygen)とは直訳すれば“マイルドな高気圧酸素”（病院での高気圧酸素治療は2気圧以上ですから、その意味でかなり“ハード”です。従ってマイルドとは“体に優しい”というニュアンスもありそうです）で、このような条件下において約1時間の“治療”をすることについて、国際高気圧協会（米国カリフォルニア州）が Mild HBO と名付けたのが始まりです。日本にも国際高気圧協会のパートナーとして日本国際高気圧協会があります。

さて、一般の方々には次に述べるのが重要なポイントです。まずは Mild HBO という方法が真に“治療”または“健康回復”となるかということです。そしてそのことを本当に科学的に叶えようとするならば、医学的には当然のことながら「酸素濃度はより高く」などという条件が求められます。そして、そのようであれば、安全管理をどうするかという問題が生じます。

そこで「1.3気圧の空気」の中に私たちが入った時に、体に溶け込む酸素が増えるのか、酸素の行きにくい（脳梗塞などは血の流れが滞っている）場所があったとしてそれが救えるのか、つまりそのような酸素供給の増加ができるのかなどがまずは問われます。これらの問いに対して、高気圧酸素治療に関する国際的な学会も、私どもの日本臨床高気圧酸素・潜水医学会や他の国内学会も否定的です。つまり高気圧酸素治療にはならないということです。ただし、国際高気圧協会が言うように「従来の高気圧酸素治療の対象にならないものに効果がある」というなら、それはそれとして経験を積み重ねることにより「効果のある対象」を示すことが社会的に意義あることと思われれます。

もう一つのポイントは高気圧酸素治療を行おうと思えば膨張式のチャンバーでもそれが可能であるということです。勿論医師の監督下において安全を確認しながら行えば「従来

の高気圧酸素治療の対象」にも用いることができ、その場合には治療効果もあるということです。ということで、私たちの杞憂は「Mild HBO は“体に溶け込む酸素が増える”」という謳い文句の一点に絞られます。先述のように 1.3 気圧の空気の中に 1 時間いても“体に溶け込む酸素”は増えません。ですから、この謳い文句は「酸素濃度はより高く」などという条件を“ひそかに”行っていて、その結果ではないのかという疑問です。“ひそかに”行っているなら、単に誇大広告の誇りを受ける程度で済む問題ではありません。米国でハリケーンから逃れるためのバスが炎上したというニュースが先日報道されました。これは呼吸器疾患の治療のため高濃度の酸素を吸入しながら避難バスに乗っていた老人患者がいて、そこに引火して惨事に至ったというものです。高濃度酸素の扱いには多くの注意点があって、病院にはそのためのルールがたくさんあります。“体に溶け込む酸素を増やそう”というなら、法律やその他の約束事を守らねばなりません。

膨張式のチャンバーはすでに数百台が我が国で稼動しているといえます。勿論、医療機関でないところでの稼動です。一般の方々からのニーズがこんなにも高いということです。しかしそれにもかかわらず、正確な稼動の実態や統計がまとめられているわけではありません。何とか正しい情報を収集して、万が一にも“ひそかに”があればそれに関する事実を確認し、未然に事故を防ぐ必要もあるでしょう。前述の日本国際高気圧協会が今年 9 月より日本国際健康気圧協会に名称変更し、気圧と健康について積極的に取組まれるそうです。日本臨床高気圧酸素・潜水医学会としてもお互い情報交換をすることにやぶさかではなく、多くの利用者にとって安全・安心な“膨張式のチャンバー”が求められているわけですから、私たちはこのことを目的に多いに知恵を出し合う必要があるのではないのでしょうか。

(平成 17 年 10 月)